

赤見国玉神社

吉田光良 調

「^{あかみくにたま}赤見国玉神社」は西成連区の西隣の富士連区にある。大変に由緒がある神社とされている。住所は赤見3-1-25、名岐バイパス「朝日2丁目」交差点の東北である。バイパスからは店舗があって見えないが、信号を東へ曲がれば直ぐ左手に参道が見える。

境内地に大木があるわけではないが、参道には桜の古木が数本植えられており、春には道行く人を楽しませてくれる。また手洗舎の北隣には四季桜が1本植えられていて、正月の初詣のころから小さな花を咲かせる。心を和ませてくれるばかりか、西隣の名岐バイパス(国道22号線)の喧騒をも忘れさせてくれる。

社殿は巨岩で築きあげられた一段と高い基礎の上に鎮座されており、格式のある立派な社殿である。手前の拝殿の南北の切妻部分には素晴らしい彫刻があり、重厚さが感じられる。その他、祭文殿、透塀、制札、燈籠、鳥居、狛犬等々の建造物も立派に完備されている。

この神社がいつ建てられたのかは不明であるが、室町時代末期に現在地にあったことがわかっている。また、それ以前はバイパスを越えた西南の方向にある、富士小学校の辺りに鎮座していたのではないかとの説もある。

祭神は「赤見^{こうじょ}皇女」である。赤見皇女は、第24代仁賢天皇(449年～498年)の第8皇女で、後に第27代^{あんかん}安閑天皇の妃となった。この皇女は「春日山田皇女」(かすがのやまだのひめみこ)が通称で、「山田赤見皇女」、「赤見皇女」、「山田皇女」などとも呼ばれる。現在、赤見には「山田」という姓の家が数軒ある。

「赤見皇女」が「赤見」という地名の起源であるといわれる。また赤見の「見」は「水」に相通じ、赤見＝赤水とも考えられる。赤水とは赤茶色をした「ソブ水」のことであり、木曾川の流域である関係から生じた赤水は濾過して飲料に使っていたようだが、それが地名の起源になったとも言われる。ちなみに、祖父江町はこのソブ水からきている。

「国玉」の意味であるが、およそ神とは天界へあがめ奉られた人間の投影であるから、神にも人と同様に二面性があるという考え方がある。これを神の両義性といって、「荒魂」(あらみたま)と「和魂」(にぎみたま)の二つに分けているが、優しい神である「和魂」は別に「国玉」とも書く。国玉はその土地(国)を経営し人々を慈しむ神である。「国玉神社」は庶民が祀った神の住まうところ、その土地の^{あんじんりゅうめい}安心立命の神社である。

なお、国玉は「国魂」とも「国霊」とも書き、いずれも「くにたま」と呼ぶ。

(参考)

「旧西大赤見」は西成連区に所属していたが、国道22号線の建設(1958-69)に伴って都市計画区域となり、富士小学校の新設とともに富士連区に編入された。現在の富士小学校の所在地である「富士」は、旧西大赤見の字名である。現在の「一宮市営球場」から東はかつては広大な水田地帯が広がり、旧西大赤見の地所であった。旧西成連区の地域の大きさと、かつて大赤見と言われた地域の広さは驚くばかりである。

現在「大赤見」と「小赤見」の名称は西成連区に、「赤見」は富士連区にある。

(参考図書)

小池昭著「遙かなる雲間に」 浅井哲夫著「赤見国玉神社記」 一宮市史西成編